

〈巻頭言〉

国際認識の不確かさ

——「歴史と未来」第三号刊行に当って——

中 嶋 嶺 雄

一九七五年は、アジアの歴史の重要な節目になろう。インドシナ半島の情勢が急変し、ヴェトナム戦争が終ったからでもあるが、それ以上に、ヴェトナム革命ないしはインドシナ革命の一段階がここに成就したからである。

だが、この明瞭な事実には、サイゴン陥落以来、たちどころに明らかになつたとはいえず、それまではきわめて不明確であつた。というより、多くの日本人、とくに知識人やジャーナリズムの世界では、ヴェトナム戦争はとりもなおさず民族解放闘争だと見做され、従つて、その主体は広汎な民族統一戦線であるとする見方とそのことへの共感が一般的であつた。しかし、サイゴン陥落以来、現地で頻用される言葉は「解放」ではなく「革命」だといわれるように、そして、ヴェトナム労働党こそこの革命の担い手であり、サイゴンを

陥落させたのは南の解放戦線の兵士であるよりは、北ヴェトナムの正規軍であつたことに示されるように、ヴェトナム戦争は彼らにとつて、まさに革命戦争だつたのである。

つまりアジアの三十年戦争といわれるヴェトナム戦争は、国際的内戦としての様相を呈した革命戦争であり、中国の革命戦争に匹敵する長期の革命の過程であつた。そして、七三年のバリ協定以降は、まさに四六年以降の中国内戦のプロセスと比較し得るのであつて、中国革命から四半世紀のちに、もう一つのアジアの革命がようやく勝利を得たのであつた。このような規準で考えると、多くの問題が解明されると同時に、そこでの認識は、次のような問題に発展する。まず第一は、今回のインドシナ半島の事態は、まさに三十年にわたる革命のプロセスがあつてこそ成就したのだという問題である。

従つて、今回の事態はそれがたまたま国際的危機の連動性が叫ばれる今日の国際環境のなかにおいて生じたので、その衝撃はきわめて大きかつたが、同様の事態が、たとえば朝鮮半島にただちに連動して発生すると見るのは、センセーショナルな週刊誌の展望であるかもしれない。もしくはドミノ理論的な冷戦時代の見方であつて、国際関係論の立場からのリアルな認識ではない。

第二に、かつて一九四九年の中国革命の勝利がスターリンにとつては、大変やつかいなことであつたのと同様、今回のハノイの勝利は、北京にとつて、大変やつかいことになりそうだという問題である。すでにハノイは、今回の勝利を毛沢東型革命戦略つまり農村から都市を包囲する戦略を排したことにあつた旨をあからさまに語りはじめてゐる。そのうえ、中ソ対立は、アジアにおいてさらに激しく角逐するであろう。

事態が急激に動きはじめると、つい情動的な見方に走るのは人間の性だといえようが、われわれの国際認識はきわめて不確かなものである場合が多いのである。私自身、本年初頭には、ソ連、モンゴル、中国を縦断し、とくにウランバートルから北京まではゴビの砂漠の国境を越えて三日がかりの汽車旅をしてみて、中ソ兩國の中間地帯としてのモンゴル民族の居住空間が中ソ関係史においても

つ歴史的な意味の壮大さを実感し、私自身の認識を糾さざるを得なかつた。この六月には板門店の非武装地帯を訪れて、三十八度線の意味の痛々しさとそのわが国にとつての距離の近さを再認識せざるを得なかつた。

ところで、「歴史と未来」は、ここに第三号を出すことになつた。俗に三号雑誌という言葉がある。世の中には三号までしか出ない雑誌の方が数多いのかも知れないが、わが「歴史と未来」は、三号目から定期刊行化することに、ゼミの会の諸君の意見がまとまつた。本誌のような素人雑誌ではない中央公論社の「歴史と人物」も、たしか数回、試験誌を出した上で、月刊の定期化をはかつていつた。こちらは年一回の刊行だが、創刊号は「歴史と人物」より古く一九六八年だから、誌名も独自のものだし、定期化までにも数年を要して満を持したことになる(…………)。

本年は、私が教壇に立つようになってから十年目。この機会に、東京外国語大学には、本年ようやく国際関係論が講座として正式に設置されたことを御報告したい。但し、国立大学で国際関係論の講座が設置されているのは本学を含めてまだ四大学にすぎない。道は速く、時は流れる。(一九七五年 立秋の朝 松本にて)

新経済政策が発表された一九七一年八月から、一九七四年八月、ウォーターゲート事件の混乱の中で、ニクソン大統領が辞任するまでの三年間は、いわゆる「ニクソン・ミックス」の時代である。この間、誕生以来様々な曲折を経てきたニクソン政権は、それなりの一貫性をもってこの新政策を段階的に実行してきた。その過程で、他産業への産業連関度が強く、文字通りアメリカ経済のリーディング・インダストリーたる自動車産業の大幅な売上げ増加に支えられ、アメリカ経済は活況を取り戻し、日米貿易収支の均衡化傾向をはじめ、アメリカ政府にとっては懸案の解決めいたものもみることができた。

しかし、旺盛を極めた設備投資は、一転、落ち込みをみせ、一九七五年にはいつてからの失業率はかつてない危機的な数字を示すに至った。アメリカ経済にとつての構造的問題は未解決であったといわざるを得ない。そのことは、インドシナにおける決定的な軍事的敗北と相俟つて、国内での精神風土の荒廃をもたらしつつ、国際社会でのアメリカの威信失墜を惹起した。アメリカ経済とアメリカをめぐる国際関係は、核拡散を伴った多核化の中で、一層、緊張感と深刻感を増してきているのである。フォードのアメリカは今までにない苦難の時代を迎えたといえよう。

(註一) Henry A. Kissinger, "Central Issues of

American Foreign Policy," American Foreign Policy, W. N. Norton Co. Inc., N.Y., 1969 参照。

(註二) アメリカの金保有額は、一九五九年末の一九四・六億ド

ルから、一九七〇年末には、一〇七・三億ドルに減少した。これは、国際収支の累積赤字のうち、八四・三億ドルを金で決済したためである。それでも、ニクソン新経済政策が発表された時点で、なお二六〇億ドルが、本来金の交換請求に充てるべきアメリカの対外債務として残されている。

三菱総合研究所「ドルショックと日本経済の進路」、

一、ニクソン新経済政策の照準、九ページ参照

(はこだ・じゅんや 英米語科四八年度卒)

### 研修旅行メモ

昭和四十九年度研修旅行が、早春の伊豆天城高原で行なわれた。第一日目は、スライドを用いての中嶋先生の「社会主義三カ国縦貫記」と題するお話しがあつた(「モスクワ・ウランバートル」北京)。「中央公論」一九七五年三月号参照)。翌日はまず、都庁を担当している日経新聞記者・勝又美智雄氏の講演が行なわれた(九頁参照)。つづいて、四十九年度卒論執筆者による卒論発表会がもたれ(十九頁参照)、中嶋先生による講評と活発な討論が行なわれた。最後に、「中嶋ゼミの会」発足についての話し合いに移り、「中嶋ゼミの会」の方向づけに合意をみた(八十七頁参照)。わずか二日間の日程にもかかわらず、有意義な研修旅行であつた。

● 冷房のきいた大書店を散歩。おびただし種類の雑誌が読者を待っている。わが「歴史と未来」もいつかその仲間入りをしたいと、大それた夢をチョンビリ抱く。そんなことを編集長氏に話したら、曰く、「外語の生協の書棚にのるじゃないか」。今号はその線で妥協、妥協。(伊藤 努)

● 四年の夏、卒論の夏。毎日図書館がよいで狂勉強、といいたところだが、「歴史と未来」にかかわっているうちに、夏休みも半分が過ぎてしまった。日本の夏は、旧盆、夏祭り、そして高校野球。ほくも郷愁を求めて旅に出よう。卒論はそれからだ。(大楽文彦)

● 旅の醍醐味は財布の中味とにらめっこ。その日その日の食費と宿賃を計算してあと何日生きることができたらどうかと考えながら、孤独な日々をおくるのである。もうひとつは、過去の歴史にひたるということ。遺跡など何もなくてもただその地に立つことだけで、過去の歴史が彷彿としてくる。こじつけていうなら「歴史と未来」ということになる。「歴史と未来」編集の醍醐味も旅のそれに似たものがあつた。だが、どちらにしてもその醍醐味はすべてが終つたあとのすがしさにある。そこにいたるまでの苦しさは並大抵のものではない。本誌は編集委員の血と汗の結晶であるといつてもよい。

● 「歴史と未来」もそろそろ第三号をかぞえ今年から毎年一回発

行することになりました。例によつて発刊が予定よりも遅れ、みなさまにご迷惑をおかけしましたが、時間をかけただけ内容の充実したものになつたと自負いたしております。とくに、掲載論文が従来の倍以上となり、パラエティにとむ紙面をつくることができましたことを、編集委員一同よろこんでおります。

例年どおり卒業論文のエッセンスを中心に特別寄稿論文、旅行印象記、夏季課題図書レポートなど新しい企画をも盛り込んだ本号の構成は、従来のゼミ誌の枠を破つたものと考えております。

さいごに、ご多忙なところ時間をさいて玉稿をお寄せくださいました岩田慶治先生に厚く御礼申し上げますとともに、宣伝価値の稀少な本誌に広告をいただいた「自由社」、「時事通信社」、「新評論社」に深く感謝いたします。(伊豆見 元)

「歴史と未来」編集委員(昭和四十九年度)

- (委員長) 伊豆見 元 (東京外語大教務補佐員)
- (委員) 伊藤 努 (ドイツ語科 四年)
- (委員) 大楽 文彦 (ドイツ語科 四年)
- (委員) 伴 武澄 (中国語科 四年)
- (委員) 堀 俊雄 (中国語科 四年)

# 歴史と未来

## 第3号



1995. 1. 4

ウランバートルのラマ廟

み.

東京外国語大学 国際関係論

中嶋嶺雄ゼミナール

---

「歴史と未来」第3号 頒価 480円

発行日 1975年10月1日

編集発行人 伊豆見 元

発行所 東京外国語大学中嶋嶺雄研究室

東京都北区西ヶ原4-51-21

電話 (917) 6111 ex. 322

印刷所 アート印刷社

---